
6 . 温泉保養地

フランシス・ローレイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

6・温泉保養地

【Nコード】

N2290T

【作者名】

フランスス・ローレライ

【あらすじ】

マミの兄、津軽ジュンがウィーンを訪れた。
イサムの運転で、彼をバーデンへと案内するマミ。

5月になるとウィーンも暖かくなり、まさに春の到来が感じられるようになった。

木々には新緑があふれ、小鳥のさえずりがよく聞こえてくる。かたや人間たちは、暗めの冬の装いから、明るい春のファッションに着替えて、喜びをあらわにしている。

そんな5月中旬の土曜の朝早く、イサムとマミは、彼女の5つ上の兄貴、ジュンを出迎えるため、レンタカーでウィーンの国際空港に来ていた。

「着いた途端に遠足で、大丈夫かな？」とイサムが、マミに問いかけた。

「元気な人なのよ。短いフライトだし、大丈夫」

「彼、どんな仕事してるの？」

「アパレル系の会社で、イタリアに布地を買いに来るの」と、彼女が答えた。

そこで場内アナウンスが入った。ミラノ便である。

「ああ、これ！」と彼女が、嬉しそうにつぶやいた。

「そろそろ、到着ロビーに移動しよう」と彼が応え、彼女のジープパンのおしりを、ポンとはいたいた。

ミラノ便が到着すると、津軽ジュンは早めに税関から出てきた。

重たそうな黒いスーツケースをカートに乗せて押しながら、妹をキョロキョロ探していると、離れたところに黒髪の長い女性がいた。彼女は、こちらに向かって手を振っているではないか。

「お兄さん！」

「やあ！」

久しぶりに見るマミは笑顔が少し大人っぽくなり、綺麗になっていた。そのすぐ隣には、体格の良い日本人らしい男性がいる。こち

らはとりすました表情。

「ママミ！ 元気？！」と、津軽ジュンが、手を振りながら叫んだ。

「お兄さんも元気そうね！」

ジュンがカートをもう一押しし、ゲートから完全に出てしまうと、思わず顔がほころんだ。

「こちら、国谷さん。車を借りてくれたの！」と言って、ママミがイサムを紹介する。

「津軽です。はじめまして……どうも大変、お世話になります」と言って、ジュンが挨拶。

「国谷です。どうぞ、宜しくお願いします」

「実はねえ、もし他に予定がなければ、このままバーデンまで行くけど、どう？」と、ママミが提案。

ジュンは、びっくりした様子で、

「へえ……バーデンって？」と、尋ねた。

「近場の温泉保養地よ。風光明媚なところで、昔から音楽家が……」

「ホテルは？」

「夜の到着でいいかしら？ 町の中心は、昼間大変なの、一方通行だらけで」とママミが、説得する。

「分かった。天気もいいし、お薦めに従おうか……」

「じゃあ早速、出発！」と、ママミが号令をかけた。

3人は空港の構内を抜け、駐車場のフォルクスワーゲン・ゴルフまでたどりつく。その色は、グレー。

イサムが手早く荷物を手伝うと、すばやく左側の運転席に戻った。ジュンは助手席に、ママミは後部座席に座った。

「国谷さんは、ウィーンっ子ですか？」と、ジュンが尋ねた。

「ええ、一応。もう、抜けないでしょうね、ここの雰囲気」と、彼が答える。

イサムは運転用のサングラスをかけている。紫外線が強いのだろ
うが、少し不良っぽい感じもする。

「お仕事は？」と、ジュンが尋ねる。

「ここの、商社勤めで……」と、イサムが言いにくそうに答えた。
「住み心地は、如何ですか？」

「観光地だし、音楽好きなので退屈しませんね」

「楽器とか、やるんでしたっけ？」

「フルートを少し……実は、妹さんと同じ楽団なんですよ。でも、プロはだしと一緒だと、立場ないね」

「そんなこと、ないわ」とマミが後ろから言う。そして、

「兄は、ピアノ弾くの」と続ける。

「音楽に縁が深いんですね」と、イサムがぐぐもった声で言う。

「実は、祖先に音楽好きなロシア人がいたんです」と、ジュンが教えてくれた。

「ロシア革命の頃、満州に逃げて来たんですって。そう言えばフィツシュマン先生って、ルーマニア系？」と、マミが持ちかけた。

「そこで、親父と知り合ったらしいね……なんで？」と、気のなさそうにジュンが答える。

「彼って、時々ボーツとしてるけど、才能豊か………そう言えばお母さん達、元気にしてる？」と、彼女が尋ねた。

「元気、元気だよ」と、ジュンが答えた。

「メールの感じでもそうだね。でも、時々寂しいみたい」

イサムが、ぐんぐんスピードを上げていくが、行けども行けども、周りに高い建物が出てこない。

郊外に出たところで、あたり一面、鮮やかな黄色の、菜の花畑が現れた。

そこでジュンがフツとため息して後ろを振り返り、マミに尋ねる。

「ところで、アウガルテンとの話はどうなっているの？」

「あそこは、6月にオーディションなの」と、ぶっきらぼうに彼女が答える。

「ウィーン・フィルは？」

「そんなところ、受ける訳ないでしょう？ 女性を入れないんだから。受けたのは、コンツェルト・ハウス管弦楽団」と、マミが開き

直って答える。

そこで運転席のイサムがラジカセを操作すると、ディープ・パールの「ハイウェイ・スター」が始まった。

「結構なスピードだね」と、速度計をのぞきながらジュンが言う。ヨーロッパの右側通行に未だ慣れておらず、怖く感じるのだ。

バーデンに到着すると、あたりは緑豊かな保養地だった。歩行者も多いので、のろろ運転となった。

イサムは、丘を見下ろす大きな庭園の近くに車を停めた。

ボタン、ボタンと車のドアを開け閉めする音がする。3人で車から出ると、あたり一面に緑の匂いがした。

イサムがそこでサングラスをはずし、伸びをした。みんなも真似をする。

「国谷さん、お疲れ様」と、ジュンが声をかける。

「さあ、これから少し、歩きますよ」と、イサムが応える。

「バーデンは昔からの保養地で、ウィーンから名士たちが来たの……ハプスブルグの皇帝とか、ベートーヴェンとか、シューベルトも……」と、マミが説明しはじめる。

「へえ、そうなんだ」と、ジュンが相槌を打つ。

「モーツァルト夫人のコンスタンツェも、よくここに身を寄せたの……へえ……そう言えばマミが来てから、どのくらいになるんだっけ？」と、ジュンが尋ねる。

「3ヶ月だけど、それ以上に長く感じるわ」

「何も決まらないまま、押しかけるからだろう？」と、ジュンがつく。

「そんなことない。CD審査まで通ったし……」

「その時は、なに演奏したの？」と、イサムが尋ねた。

「チャイコフスキーのヴァイオリン協奏曲。やっぱりロシア系は、分かり易いのよ」と、マミが納得した表情で答える。

3人で見晴らしの良い庭園を散策する。

丘の上まで行くと、大理石の重厚なベンチがあり、そこで小休止となった。

あたり一面に花が咲いている。スイセンやクロツカスの黄色や紫が、とても鮮やか。

「良いね……」と言いながら、ジュンが深呼吸。

「ベートーヴェンは、この辺で、第九や莊嚴ミサを創作したらしいのよ」

3人は森林浴をしながら、ゆっくり下りてきた。

しばらくすると、道の向こう側に「Die Inspirati
on」（インスピレーション）と書かれたレストランが見えてきた。
そこでマミが、

「音楽のインスピレーションって大概、恋愛……だから恋も、仕事
なの」とつぶやいた。

これにはイサムもびっくりした。ジュンも思わず、イサムと目
を合わせ、

「よく言うよ。勝手に、わがまま……しかも、御迷惑！」と言いか
けた。

「とにかく情熱がないと、だめ。ベートーヴェンなんか、典型的よ。
ここでも、良いじゃない？」と、彼女が応じた。

「じゃ、入りましょうか？」と、イサムがジュンに尋ねた。一応、
計画通りである。

「そうしましょうか」と、彼が答えた。

店の前は、芝生のきれいな庭だった。夏場には外で食べられるよ
うに、白いテーブルがいくつか並んでいる。

「まだ少し、寒すぎますね」とつぶやきながら、イサムが扉を開い
て先導した。入るなり、

「グリユス・ゴット」と、若く背の高い、金髪のウェ이터が挨拶
してきた。

「グリユス・ゴット」と、イサムが答えた。

3人は、庭の見えるテーブルについた。白と赤のチェックのテーブルクロスが、鮮やかだった。

「何にしようかな」とつぶやきながら、ジュンがドイツ語ばかりのメニューを見て苦笑する。

「ウィーナー・シュニッツェルなら、多分はずれないわよ。仔牛のカツレツなの」とマミがアドバイスする。

「じゃあ、そうしようか」

「私は、魚にする」と、彼女が言った。

イサムも、川カマスを注文することにした。

津軽兄弟は再会を祝し、冷えた白ワインで乾杯した。運転手役のイサムは、りんごジュースのソーダ割りで、照応。

ジュンとマミは、さすがに久しぶりの再会で、積もる話題を次々とこなしていった。イサムがついに、

「ここのワイン、悪くないでしょう？」と言って、割り込んだ。

「そうですね、フルーティーだし」と、ジュンが答える。

「土地の人はソーダで割るんです、シャンパン感覚で……最近、日本にも輸出していて」と、イサムが解説した。

「ところでハプスブルグ家の紋章は、何故、双頭の鷲なんですか」とジュンが尋ねる。

「ちよつとキングギドラみたいだけど、もともと鷹の城の城主で……」と、イサムがいつもの説明を試みる。

「そう言えばロシアのロマノフ王朝も、双頭の鷲よね」と、マミが口を挟む。

「王様の仕事は、単純じゃなかったから」と、イサムがちよつと苦しそくに答える。

「頭がいっぱいで、二重人格だったとか？」と、ジュンがいたずらっぽくつぶやく。

「多民族国家オーストリア・ハンガリーを治めるには、複眼的な発想が必要で……」と、イサムが調子を合わせてみる。

するとマミが、ガイドブックの中から答えを見つけてしまった。

「もともと鷲はローマ帝国の紋章で、これを引き継いだ東ローマ帝国、別名ビザンツ帝国が、ボスポラス海峡のヨーロッパ側とアジア側を象徴して、頭を二つにした。それがオーストリアで取り入れられた、らしいの」

「なるほど……国谷さんは、ワイン以外では、どんな取引するの？」
と言つて、ジュンが話題を変えてみる。

「チーズとか、ハンガリーのサラミやフォアグラ、面白いところではトルコのサフランがありますね」

「トルコでサフランがとれるの？」と、ママが反応。

「質が良くて、しかも安いんです」と、イサムが説明する。

ジュンは、パン粉に覆われた仔牛のカツレツを満足げに見やると、そこに大ぶりの檸檬を絞つた。

「ほとんど、大判金貨だね」

「昔、ミラノから凱旋した将軍が、このカツレツのレシピを伝えたいらしいの」と、ママが得意そうに言う。

昼食が終わると二人はジュンを連れ、グランドホテル・ザウアーホフの温水プールを訪れた。

なんと遠足を主張したママに限って、体に合う水着が借りられないと騒ぐので、男二人でロッカー・ルームに。

黒っぽい水着に着替えてプールを目指すと、高い天井が弧を描く、白い内装の建物だった。

立ち込める湯気と、人を誘うように揺れる青い水が、なんとも懐かしい。

ほのかに、硫黄のにおいまでする。

「これは、いい！」と、ジュンが満足そうに漏らす。

大きな窓から採光しており、緑の芝生が清々しい。

母親に連れられた子供が、何人か嬉しそうにはしゃぎ、その声が大きく響く。

「ママは、随分と世話になっているんでしょね」と、ジュンが温

かい水の中で語りかける。

「いや、とんでもない。私こそ……あとで、カジノをのぞいて見ましょうか？」と、ばつが悪そうにイサムが答えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2290t/>

6．温泉保養地

2011年7月31日03時26分発行